

# 教育学部「学術の日」報告

高澤 健司<sup>(1)</sup>

## I. はじめに

2022年6月12日(日)に、福山市立大学港町キャンパスにて教育学部主催による「学術の日」が開催された。「学術の日」は本学教育学部児童教育学科における約10年間の教育研究を振り返るとともに、今後本学教育学部児童教育学科が取り組むべき課題を明らかにすることを期待して企画されたものである。

## II. 学術の日概要

「学術の日」は二部構成で、第1部が教育学部教員及び教育学研究科大学院生の研究発表による研究交流会、第2部はこれまで本学教育学部児童教育学科が新たな学問である児童教育学をどのように研究し、教育に生かしてきたかを考える児童教育学シンポジウムであった。第1部の研究交流会は13時から14時30分まで行われ、本学教員、大学院生、学部生など149人の参加であった。第2部の児童教育学シンポジウムは15時から17時まで行われ、本学教員、大学院生、学部生に加えてオンラインにより本学卒業生・修了生が参加し、あわせて85人の参加者があった。ここに「学術の日」の概要等を報告する。

第1部の研究交流会は福山市立大学港町キャンパス研究棟1階および2階の6つの教室において行われ、教育学部教員および教育学研究科大学院生が、各自の研究や現在の研究関心に関する発表を主にポスターを用いて行った。発表者と発表タイトルは表1に示すとおりであった。

第2部の児童教育学シンポジウムでは「本学の児童教育学は教育者・保育者の育成や成長をどのように研究してきたのか、どのように研究していくべきなのか」をテーマとし、これまで本学教育学部児童教育学科がどのような知見を積み重ねてきたのかを検討する

ために、本学科卒業生を対象とした教育者・保育者の育成や成長に関する研究を通じて、教育学部児童教育学科の教育者・保育者育成の成果と課題について議論をした。このシンポジウムでは、これまでの成果を踏まえ、教育者・保育者養成プロセスの構造化の重要性を確認した上で、子どもの育ちとともに、それを支える人たちの育ちもあわせて検討していくことの大切さが示された。また、今後の研究は大学教員だけでなく、卒業生や修了生といった現場で実践を行っている方々とともに進めることで、さらなる蓄積につながることを示された。内容の詳細については別項の報告を参照していただきたい。

## III. まとめ

学術の日では、教員や大学院生の研究発表を通じて児童教育学のこれからについて検討する機会となった。今は個々の研究がモザイク状に網羅されているところはあがるが、その研究同士をつなぎ、児童教育学を発展させていくためには現場で実践を重ねる方々との研究が重要であることが確認された。



<sup>(1)</sup>福山市立大学教育学部児童教育学科 児童教育学シンポジウム実行委員会委員長 e-mail: [k-takasawa@fcu.ac.jp](mailto:k-takasawa@fcu.ac.jp)

表1 研究交流会発表一覧

発表者	発表タイトル
上山 瑠津子 (教育学部)	保育における子ども理解を可視化する実践支援
太田 直樹 (教育学部)	オンライン上の討議による学習指導案の作成技能の変容
大庭 三枝 (教育学部)	Exploring activities to learn the culture of peace in no-contact situations with children in Hiroshima—Commemorating International Day of Peace 2021—
河合 風香 (教育学研究科院生)	心理学実験による心の状態の客観的評価—脳波を指標として
木下 恵介 (教育学研究科院生)	学習者の自己変容を促す文学の読みに関する研究 —社会文化的アプローチの視点に着目して—
田中 直美 (教育学部)	対話思想から教育を考える
時重 美樹 (教育学研究科院生)	自閉症スペクトラムの情報統合と心的状態の調整
西村 多久磨 (教育学部)	私の授業・指導行動をテキスト分析する—学生の目にはどう映ったのかな?—
林原 慎 (教育学部)	小学校「総合的な学習の時間」の現状と課題 —国際バカロレア PYP「探究の単元」からの示唆—
平野 晋吾 (教育学部)	自閉スペクトラム症児の生活リズムに関する生理心理学的研究
松永 航 (教育学研究科院生)	概念型モデルを用いた探究的な学びが「社会情動的スキル」に及ぼす効果に関する研究
山田 真世 (教育学部)	子どもの描画はおもしろい
山中 真悟 (教育学部)	理科のプログラミング教材について
渡邊 真帆 (教育学部)	園生活に慣れるってどういうこと?—入園間もない3歳児の保育環境との関係から—